

小学校社会科の「資料活用能力」の実態に関する研究

Research for the Real of "Material-Application-Ability"
in Social-Studies of Elementary School

北 俊 夫*

KITA Toshio

要 約

これまで文部省(当時)や国立教育政策研究所が実施してきたペーパーテスト調査の結果を継続的に検討すると、小学校社会科(第5学年)において、特に「資料活用」に関する問題に低下傾向が見られた。本研究は、ここに焦点を当て、教科書に掲載されている資料の形態の推移、全国大会等で実施された授業での使用資料の傾向等との関連から、子どもの資料活用能力の低下の原因や背景について考察したものである。調査研究をとおして、資料活用能力の低下と教科書の資料構成及び社会科授業の実態との間に相関関係があることが明らかになった。

キーワード： 小学校社会科、ペーパーテスト調査(教育課程実施状況調査)、学習指導要領、資料活用能力、教科書、資料の形態

1 はじめに

国立教育政策研究所教育課程研究センターは、小・中学校を対象に、平成13年度(平成14年2月、一部の学年は同年1月)に教育課程実施状況調査を実施した。これは、昭和57年度、平成6年度の2月に文部省が実施したものに続くもので、実施の目的は次のとおりである。

「小学校及び中学校の学習指導要領に基づく教育課程の実施状況について、学習指導要領における各教科の目標や内容の実現状況の把握を通して調査研究し、学習指導要領において身に付けることが求められている資質や能力が実際上児童生徒にどの程度身に付いているか、指導上の問題点は何かなどを明らかにして、今後の教育課程や学校における指導の改善に資する。」

これを受けて、学習指導要領の定める内容のうち、ペーパーテストで調査することが適当な内容項目について調査を行った。小学校では第5・6学年を対象にし、国語、社会科、算数、理科の四教科で実施された。調査の結果は、平成15年5月に「平成13年度小中学校教育課程実施状況調査報告書」として実施教科ごとにとりまとめ公表された。

本稿では、そのうち、第5学年の社会科を対象に調査の結果を検討し、社会科の学習指導上の問題点を考察するものである。

2 問題の所在

第5学年の社会科の問題は、全体で75の小問(以下、問題という)から構成された。それぞれの問題ごとにあらかじめ設定した通過率(設定通過率)に照らして、それを上回ると考えられるもの又は同程度と考えられるもの問題数の合計が50問あったことから、出題した問題数の半数以上を占めた。このことを踏まえて、文部科学省や国立教育政策研究所は、ペーパーテスト調査による社会科の目標や内容の「実現状況はおおむね良好」とであると結論を出している。問題全体の平均通過率が、設定通過率72.5%に対して、70.8%であったことから、「おおむね良好」とであると下

* 岐阜大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Study Education, Faculty of Education, Gifu University

した結論はおおむね妥当なものであるとも考えられる。

目標に照らして学力が維持されているかどうかを判断するとき、現時点における個別のデータだけで十分である。今日、子どもの学力論議が盛んに展開されており、学力低下を懸念する指摘も聞かれる。学力が低下しているのか、低下していないのかを議論するとき、それは現在のデータだけで判断することはできない。「低下」かどうかは、少なくとも二点間の違いを見る必要があり、どうしてもこれまでとの「比較」という手法が必要になってくる。

前述したように、文部科学省は過去に同様な趣旨によるペーパーテスト調査を2回実施している。それらの調査結果の数字を列挙すると、次の表1のようになる。

表1 第5学年の全問題の平均通過率の推移

実施年度	平均通過率	拠り所となった学習指導要領(実施時期)
昭和57年度	72.1%	昭和52年版(昭和55年度～平成3年度実施)
平成6年度	74.9%	平成元年版(平成4年度～平成13年度実施)
平成13年度	70.8%	平成元年版(平成4年度～平成13年度実施)

平成6年度と平成13年度に実施された問題作成において、その拠り所となった学習指導要領は同じである。問題そのものや程度には多少の違いがあるものの、いずれも同一の「学習指導要領で身に付けることが求められている内容」で問題が構成されている。今回(平成13年度)の調査結果を平成6年度調査結果と比べると、社会科における子どもの学力が全体として低下したことは明らかである。

各問題は、小問(今回は75問)のレベルで、それぞれ主たる評価の観点を設定している。「社会的な思考・判断」「観察・資料活用の技能・表現」「社会的事象についての知識・理解」の観点ごとに平均通過率を整理すると、表2のようになる。「観察・資料活用の技能・表現」の問題は、第5学年が対象であることから、「観察」については問題外である。またペーパーテストによる調査という形態上、「資料活用の技能」(いわゆる資料活用能力)を見る問題が中心になっている。「表現」については、正対した問題はほとんど見られない。

なお、評価の観点が「観察・資料活用の技能・表現」と表記するようになったのは、平成4年度の児童指導要録からで、それ以前(昭和46年度、55年度改訂の児童指導要録)は「観察力や資料活用能力」となっていた。

次の表2は、実施年度ごとに観点別の平均通過率をまとめたものである。各小問の通過率を観点ごとにまとめ、平均を出したものである。

表2 第5学年の観点別の平均通過率の推移

実施年度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
昭和57年度	75.2%	75.4%	71.0%
平成6年度	73.8%	74.8%	76.1%
平成13年度	70.2%	69.3%	72.6%

まず平成13年度について、各観点を相対的に見ると、「知識・理解」の結果に比べて「思考・判断」や「技能・表現」の結果が低いことがわかる。後者の二つは、学習指導要領に示された各学年の目標として三番目に位置づけられている「能力にかかわる目標」を受けて設定されている観点である。

(参考)第5学年の「能力にかかわる目標」(平成10年版学習指導要領)

(3) 社会的な事象を具体的に調査し、地図、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、調べたことを表現するとともに、社会的な事象の意味について考える力を育てるようにする。

さらに、「思考・判断」と「技能・表現」の観点についてそれぞれ過去の2回と比べて見ると、いずれも徐々に低下してきていることがわかる。

このように、子どもの「考える力」や「調べる力」が低下してきたのはどうしてか。背景に何が影響しているのか。ここに、本研究において子どもの「資料活用能力」を取り上げる問題状況の所在がある。

今回の調査において、前回の平成6年度と同一の問題が、小問の数で19問出題されている。先の「報告書」には、これらの結果が次の表3のように示されている。「関心・意欲・態度」に関するデータは省略した。数字は、いずれも問題数を示している。

表3 前回（平成6年度）と同一問題の調査結果の観点別一覧

観 点	問題数	前回は有意に 上回るもの	前回と有意に 差のないもの	前回は有意に 下回るもの
思考・判断	7	0	2	5
技能・表現	8	1	2	5
知識・理解	4	1	1	2
合 計	19	2	5	12

このデータからわかることは、同一問題の調査結果においても、特に「思考・判断」に関する問題では7問中6問が、「技能・表現」に関する問題では8問中5問が、それぞれ前回と比べて下回っていることである。

問題のなかには、昭和57年度、平成6年度に実施したときと同一の問題が数問出題されている。その一つが、「米の生産量」を題材にしたものである（図1：次ページ）。同一問題といっても、社会科の性格上、データの更新がされている。

なお、次ページの問題について、問題作成者は各問題の作問のねらいと評価の観点を、次のように設定している。

- (1)(ア)(イ)
- ・資料から米の生産量の多い県を読み取ることができる。
 - 特に関連のある観点は「知識・理解」であるが、「技能・表現」の観点とも関連している。
- (2)
- ・資料から米の生産量と稲の作付面積との関係を考えることができる。
 - 特に関連のある観点は「思考・判断」であるが、「知識・理解」の観点とも関連している。

表4は、同一問題の結果の推移を整理したものである。

表4 同一問題の結果の推移

実施年度	(1)(ア)	(1)(イ)	(2)	平均通過率
昭和57年度	84.2%	81.0%	67.0%	77.4%
平成6年度	82.3%	78.0%	61.3%	73.9%
平成13年度	78.9%	71.3%	58.4%	69.5%
57年度との比較	5.3%	9.7%	8.6%	7.9%

表4の結果から、同一問題においても、すべての小問の通過率が低下してきていることがわかる。昭和57年度実施と比べると、各小問において、それぞれ5.3%、9.7%、8.6%と大幅に低下している。全体の平均通過率は7.9%の低下である。

このように、さまざまなデータを総括的に検討してみると、ペーパーテスト調査の結果を見るかぎりにおいて、子どもの社会科の学力のうち、特に「思考・判断」や「技能・表現」(特に資料から事実を読み取るなどの「資料活用」)の能力が低下してきているのではないかと推察される。

以上のことから、本研究では、子どもの「考える力」や「調べる力」が低下してきたのはどうしてかを研究課題として設定し、その背景に何が影響しているのかを明らかにすることをねらいとして、調査研究を進めることとした。

(1) 次の文は、わが国の米の生産量についてのべたものです。次の文の(ア)、(イ)にあてはまる言葉を……の中から一つずつ選んで、その番号を□の中に書きなさい。

米は日本全国のどの都道府県でもつくられています。米を60万トン以上生産しているのは、北海道と(ア)県です。50万トン以上で60万トン未満の県は、東北地方の(イ)県です。

- 1 青森 2 新潟 3 富山 4 秋田

(ア) (イ)

(1) (2)

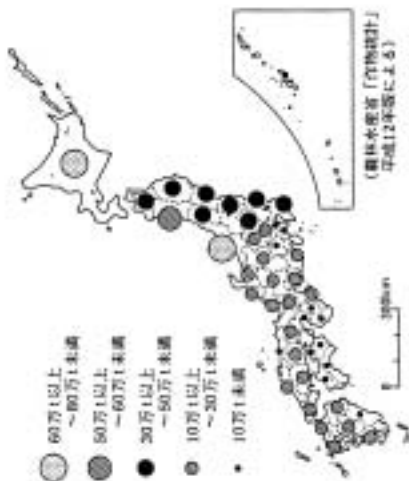
(2) 次の中からよいと思う文を一つ選んで、その番号を□の中に書きなさい。

- 北海道や東北地方は、米の生産量の多いところですが、それは、作付面積が広いからです。
- 大都市のある県は、米の生産量の多いところですが、それは、人口が多いので、米をたくさんつくる必要があるからです。
- 西日本地方は、米の生産量の多いところですが、それは、作付面積が広いうえに、二期作(同じ耕地で1年に2回収かくなること)もおこなわれているからです。
- 北海道や東北地方は、米の生産量の多いところですが、それは、作付面積はせいまいけれど、米をつくるのによい気候だからです。

(3)

1 次の資料を見て、あとの問題に答えなさい。

(資料1) 都道府県別の米の生産量(平成11年)



(資料2) 都道府県別のいねの作付面積(平成11年)



図1 昭和57年度及び平成6年度との同一問題(平成13年度実施の問題)

3 研究の仮説と方法

国立教育政策研究所教育課程研究センターの実施した学力調査において、第5学年の子どもの学力の状況をこれまでの調査結果と比べると、特に「思考・判断」と「技能・表現」に関する問題において低下していることが明らかになった。

この背景や原因として、学力の形成に影響を及ぼすものとして次の二つが考えられる。一つは、学習者である子ども自身の内面に何らかの原因や理由がある場合、いま一つは、子どもを取りまく外的な要因である社会やおとなからの影響、とりわけ教師の子どもへのかかわり方に原因がある場合である。本調査の結果が一人一人の子どもを対象にした個々のデータではなく、全国規模で実施され集計されたものであることから、ここでは前者に根拠を求めることは合理的でないと考えた。子どもの周囲に原因や背景を求めるとき、子どもの社会科の学力形成にもっとも強く、かつ直接的に影響を与えるものとして、日々の社会科授業の実態が考えられる。

教師の授業の実態が子どもの学力形成に深くかかわっていることから、日々の社会科授業において、特に「思考・判断」や「技能・表現」の能力の指導が十分に行われていないことが考えられる。社会科の授業では、さまざまな形態の基礎的な資料を活用して具体的に調べたり、調べたことをもとに社会的事象の意味や役割などを考えたりすることが伝統的に行われてきたが、最近、とりわけ平成元年版学習指導要領の完全実施以降の各学校や教室において、こうした基礎的な資料を効果的に活用した社会科本来の授業が十分展開されていないのではないかと考えた。これによって、先に紹介したように「思考・判断」「技能・表現」の調査結果に低下傾向が見られるようになったのではないと思われる。これが、本研究の仮説である。調査の結果には、授業の実態が当然反映されているからである。

本調査では、上記の仮説を検証するために、二つの観点のうち「技能・表現」に焦点を当て、特に「資料活用」の実態を調査することとした。そして、次のような研究の方法・内容を設定した。

子どもや教師にとって主たる教材としての教科書は、社会科授業において重要な役割を果たしている。このことから、昭和43年版以降の学習指導要領にもとづいて編集された社会科の第5学年の教科書（上・下巻の2冊）にどのような形態の資料がどの程度掲載されてきたか、資料の形態と数の変遷を調べる。

社会科の実際の授業において、どのような資料が活用されているか。ここでは、平成15年に開催された小学校社会科の全国大会や地方大会で公開された授業において使用された資料の形態と数を整理し検討する。全国大会などとして実施された授業は、事前に十分吟味・検討されており、一定のモデル授業として提案されたものであると考えられる。

文部科学省（当時、文部省）や国立教育政策研究所が実施してきた過去3回のペーパーテスト調査において、「技能・表現」（資料活用）を問う問題で使用された資料の形態とその傾向を調べる。その結果を、の関連で考察する。

4 研究の内容と結果

（1）教科書に見る「資料」掲載の推移と傾向

第5学年の教科書（上・下巻の2冊）は、全国シェアの高い上位2社のものを採用した。教科書は、同一学習指導要領の実施下において、数回の一部改訂（いわゆる「四分の一改訂」など）が行われている。同じ学習指導要領にもとづく教科書であっても、その内容構成は改訂が重ねられている。そのため、ここでは、改訂された学習指導要領（昭和43年、昭和52年、平成元年、平成10年）が完全実施された初年度に使用された教科書を調査対象とした。また、平成10年版は、初年度（平成14年度使用）と併せて、その後の学習指導要領一部改正に対応して編集された17年度使用予定の教科書も対象にした。17年度使用予定の教科書には、いわゆる発展的な学習のための教材や学習内容を含めて構成されている。

学習指導要領の改訂によって、指導内容が一部新たに追加されたり、他学年へ移行したりしているが、学習指導要領の各学年の目標に示された資料活用の趣旨には根本的な変更がないことから、おおまかな変遷をとらえることは可能であると判断した。教科書は印刷された教材であることから、資料の形態にはおのずから限界がある。このことから、「資料」の分類は、小学校の現場で通常使われている範囲の形態と名称に揃えた。表中の数字は、「実数（%）」を

示す。

表5 1 教科書(第5学年)に見る資料形態の推移(A社)

学習指導要領	写真	地図	統計地図	図表	イラスト	文書	グラフ	その他	合計
昭和43年版	116 (35.0)	9 (2.7)	52 (15.7)	14 (4.2)	9 (2.7)	0 (0.0)	131 (39.7)	0 (0.0)	331
昭和52年版	136 (37.0)	17 (4.6)	52 (14.2)	30 (8.2)	18 (4.9)	15 (4.1)	98 (26.7)	1 (0.3)	367
平成元年版	340 (54.0)	41 (6.5)	38 (6.0)	18 (2.9)	46 (7.3)	33 (5.2)	112 (17.8)	2 (0.3)	630
平成10年版	349 (61.6)	24 (4.2)	30 (5.3)	23 (4.1)	39 (6.9)	32 (5.6)	67 (11.8)	3 (0.5)	567
平成10年版(*)	390 (66.5)	22 (3.7)	24 (4.1)	30 (5.1)	30 (5.1)	35 (6.0)	56 (9.5)	0 (0.0)	587

表5 2 教科書(第5学年)に見る資料形態の推移(B社)

学習指導要領	写真	地図	統計地図	図表	イラスト	文書	グラフ	その他	合計
昭和43年版	96 (27.0)	3 (0.8)	73 (20.6)	24 (6.8)	12 (3.4)	2 (0.6)	145 (40.8)	0 (0.0)	355
昭和52年版	106 (27.5)	9 (2.3)	43 (11.2)	25 (6.5)	30 (7.8)	34 (8.8)	138 (35.9)	0 (0.0)	385
平成元年版	223 (45.6)	23 (4.7)	26 (5.3)	39 (8.0)	27 (5.5)	34 (7.0)	114 (23.3)	3 (0.6)	489
平成10年版	264 (53.3)	16 (3.2)	25 (5.1)	35 (7.1)	45 (9.1)	37 (7.5)	69 (13.9)	4 (0.8)	495
平成10年版(*)	298 (60.4)	28 (4.2)	35 (5.3)	38 (5.8)	39 (5.9)	34 (5.2)	84 (12.7)	3 (0.5)	659

(注)

各学習指導要領における教科書は、昭和43年版は昭和45年度使用、昭和52年版は昭和56年度使用、平成元年版は平成4年度使用、平成10年版は平成14年度使用と平成17年度使用予定のものである。

なお、平成17年度使用予定の教科書(*)には、平成15年12月の学習指導要領の一部改正の趣旨を先取りして、教科書検定基準の一部改訂を踏まえて編集され、検定された。これによって、学習指導要領に示されていない、いわゆる発展的な学習内容に相当する教材(資料)が構成されている。こうした資料等は必ずしもすべての子どもが学習するようになっていないが、上記の表ではこれらについてもカウントした。

「写真」とは社会的事象を撮影したもののほかに、インターネットなどの映像的な画面も含めた。「地図」とは日本、世界、県や市などの地図である。地形図や位置を示す部分地図などを含めた。「統計地図」とは、地図上に統計が示されている資料的な地図であり、日本、世界、県や市などの地図がある。「図表」とは、資料が表組みで示されたもの、模式図で示されたものなどである。「イラスト」とは、挿絵、マンガなどを指す。単なるキャラクターの紹介など資料性のないものは省いた。「文書」とは、例えば「 さんの話」のように文書として示されている資料である。一般に囲み記事である。「グラフ」には、棒グラフ、折れ線グラフ、円グラフ、帯グラフが含まれる。「その他」は、年表、単位についての解説などである。

なお、一つの資料名で写真と図表など複数の形態の資料が組み合わせてある場合には、それぞれ一点としてカウントした。

調査結果から、教科書に掲載されている資料の形態に見る変遷と傾向について、次のようなことが明らかになった。

平成元年版から、資料の合計点数が急増している。A社の場合には2倍近くにもなっている。これは、このときから、教科書がA5版からB5版に大型化したことにもよるが、編集上、文字の量(従来の本文に当たる部分)が

少なくなり、紙面が全体的にビジュアル化されたことによるものと思われる。

各資料形態の全体のなかで占める割合は、昭和43年版ではグラフが4割近くもあったが、平成元年版から写真が急増し、グラフとの間で逆転している。その後の資料の中心は写真である。平成10年版（平成14年度使用）では6割近くを占めている。イラストについても、昭和43年版と比べると3倍以上増加している。写真やイラストに見るこうした傾向は、A社、B社の教科書に共通している。

統計資料（統計地図やグラフ）は、全体の傾向として減少してきた。「 さんの話」といった「文章資料」は、昭和43年版にはほとんど見られなかったが、その後囲み記事として示すなど本文と切り離して資料的な扱いになった。

以上のことから、教科書に見られる資料掲載の傾向は、地図やグラフなどの統計資料から、写真やイラストといったビジュアル性を高めた視覚に訴える資料に大きく転換が図られている。こうした資料形態の変化が子どもの地図や統計資料などを活用して調べる力の育成に大きく影響しているのではないかと推測できる。

（2） 社会科授業に見る「資料」活用の傾向

全国小学校社会科研究協議会（小学校社会科の実践レベルの唯一の全国組織）は、毎年全国大会を開催している。平成14年度には京都市（平成15年2月7日）で、平成15年度には東京都（平成15年10月30日）で、それぞれ四つの小学校を会場に社会科の授業が公開された。また、平成15年11月14日には九州小学校社会科研究協議会研究大会が熊本市で開催された。

表6 1～3は、それぞれの会場校の公開授業でどのような資料が活用されたかを調査し、整理したものである。ここでは、第3学年から第6学年までの公開された全学級を対象にした。AからDは京都市内、EからHは東京都区内、Iは熊本市内のそれぞれ小学校である。数字は、使用した学級数を表す。資料等の数ではない。したがって、小計欄の資料ごとに示してある数字（%）は、それぞれの資料を全学級当たり活用した学級の割合である。

表6 1 京都大会における資料活用の実際（平成15年2月7日）

学校（学級数）	地 図	グラフ	地球儀	年 表	写 真	絵	ビデオ	実 物	人 材	その他	合 計
A小（10学級）	3	4	3	0	3	1	1	5	4	1	25
B小（4学級）	2	0	0	0	1	1	1	1	1	0	7
C小（8学級）	2	1	0	0	5	0	1	2	4	2	17
D小（12学級）	3	1	0	2	6	0	0	4	2	3	21
小計（34学級）	10	6	3	2	15	2	3	12	11	6	70
（%）	29.4	17.6	8.8	5.9	44.1	5.9	8.8	35.3	32.4	17.6	

京都大会では、四つの会場（延べ34学級）をとりまとめると、写真を活用した学級が最も多い。次いで、実物資料、地域の人材、地図の順になっている。授業では、教科書では見られない、実物を提示したり、地域の人の話を教材（資料）として活用したりしている。

半数以上の学級で取り上げている資料は見られない。地球儀、年表、写真、絵、ビデオといった形態の資料を活用した学級は、1割以下であった。

表6 2 東京大会における資料活用の実際(平成15年10月30日)

学校(学級数)	地図	グラフ	地球儀	年表	写真	絵	ビデオ	実物	人材	その他	合計
E小(8学級)	3	3	0	2	7	6	4	4	4	3	36
F小(8学級)	5	0	0	3	7	4	1	5	3	0	28
G小(8学級)	1	2	0	1	6	2	0	4	7	0	23
H小(8学級)	6	0	0	0	7	2	4	4	8	0	31
小計(32学級)	15	5	0	6	27	14	9	17	22	3	118
(%)	46.9	15.6	0.0	18.8	84.4	43.8	28.1	53.1	68.8	9.4	

東京大会については、四会場延べ32学級の資料の活用状況とをとりまとめた。全体の傾向を見ると、同様に写真を活用した学級が32学級中27学級(全体の84.4%の学級)で最も多い。次いで地域の人材、実物資料を半数以上の学級で活用している。いずれも子どもの視覚に訴え、社会的事象を具体的にとらえさせる指導の工夫である。これらに続いて、地図、絵(イラスト)の順に多くなっている。

取り上げられた単元の状況もあり、地球儀を活用した学級は見られなかった。グラフを活用した学級は、先の京都大会の場合と同様に、わずかに1割台であった。

公開授業という特別な場面ではあるが、活用される資料の形態に以上のような傾向性が見られる。

表6 3 熊本大会における資料活用の実際(平成15年11月14日)

学校(学級数)	地図	グラフ	地球儀	年表	写真	絵	ビデオ	実物	人材	その他	合計
I小(8学級)	3	2	0	2	6	3	0	1	1	0	18
(%)	37.5	25.0	0.0	25.0	75.0	37.5	0.0	12.5	12.5	0.0	

熊本大会でも、他の大会と同じように写真が最も多く、ここでは特にきわだっている。4学級のうち3学級で使用されている頻度である。次いで、地図や絵、グラフの順になっている。地球儀やビデオ教材を使用した学級はなかった。

表6 4は、前述した三つの大会において公開された授業での資料活用の実態をまとめたものである。対象学級数は74である。

表6 4 3つの大会で公開された授業における資料活用の実際

学校(学級数)	地図	グラフ	地球儀	年表	写真	絵	ビデオ	実物	人材	その他	合計
合計(74学級)	28	13	3	10	48	19	12	30	34	9	206
(%)	37.8	17.6	4.1	13	64.9	25.7	16.2	40.5	45.9	12.2	

(注)・いずれの表においても、「人材」には、音声テープを含む。

・学習資料として活用した子どものノートや作品などは省略した。

社会科の全国大会等で公開された授業での資料活用状況を見ると、いずれの会場の授業においても、「写真」が最も多く、74学級中48の学級、すなわち公開された全学級の64.9%の学級において活用されている。これに地域の人材、実物資料、地図と続いている。提示された資料は、そのほとんどが授業者(あるいは授業協力者)の自作によるものである。教科書のなかの資料を活用した場面はほとんど見られない。ここに、社会科における公開授業の特色がある。

写真のほかに、地域の人たちを教室に招いて話を聞くなど、地域の人材をコミュニティ・ティーチャーとして活用した授業も盛んである。実物資料も活用されている。

全体的に見て、地図が比較的多くの学級で活用された背景には、社会科という教科の大会であったことから、授業者が社会科の教科としての役割を強く意識していたためと思われる。また、実施の時期から「わが国の国土の自然の

様子」や「世界の国の人々の暮らし」などの単元が取り上げられたことも背景にあると考えられる。

なお、ここでは、どの形態の資料を活用したかという観点で整理されており、各形態の資料の数そのものを集計したのではない。資料数を対象に集計すると、写真一つをとっても一学級で数枚使用することもあることから、数字は増加する。

(3) ペーパーテスト調査に見る掲載資料の傾向

過去3回のペーパーテスト調査において、主として「技能・表現」(ペーパーテストという形態から実際は資料活用能力)を問う問題に活用された資料の形態を調べると、表7のように整理することができた。表中の%は、それぞれの資料が資料全体のうち占める割合を示したものである。

表7 ペーパーテスト調査に使用された資料の傾向

実施年度	統計地図	グラフ	年表	図表	文書	写真	イラスト	地図帳	合計
昭和58年度 (%)	3 (18.8)	13 (81.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	16
平成6年度 (%)	2 (7.7)	14 (53.9)	2 (7.7)	3 (11.5)	3 (11.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (7.7)	26
平成13年度 (%)	5 (15.2)	17 (51.4)	1 (3.0)	4 (12.1)	2 (6.1)	0 (0.0)	2 (6.1)	2 (6.1)	33

なお、昭和58年度と平成6年度は、問題が2セットであったが、平成13年度は3セット作成されたことにより、問題数が1.5倍に増加した。1セットとは、一単位時間(45分)で実施する問題のまとまりを指している。

平成13年度実施の問題には、次のような形態の資料が掲載された。()内は、その一例を示した。

- ・統計地図(都道府県別のトマトの生産量、主な工業地帯・工業地域の分布図、桜前線(桜が開花する時期)など統計や情報を盛り込んだ地図)
- ・グラフ(大工場と中小工場の工場数(帯グラフ)、わが国の自動車の生産台数の移り変わり(円グラフ)、農家で働く人の数の変化(折れ線グラフ)など)
- ・年表(びわ湖のよごれ防止に関する年表)
- ・図表(沖縄県の花が東京都の小売店に届くまで、日本の主な輸入品と輸出品など)
- ・文書(親子の会話文、葉書による記述など)
- ・イラスト(日本の四季、冬の季節風(仕組み図)など)
- ・地図帳の活用(地図表の「さくいん」、地図や交通網などの活用)

過去のペーパーテスト調査問題に構成された資料の傾向を「資料の形態」の観点から整理してみると、次のようなことが明らかになった。

いずれの年度においても、円グラフや棒グラフ、折れ線グラフなどのグラフが数多く登場し、問題構成の中心に位置づいている。昭和58年度は81.2%、平成6年度は53.9%、平成13年度は51.9%と、グラフが最も高い割合を占めている。次いで、統計地図や図表が多い。グラフが全体に占める割合は、全体的に減少傾向にある。

昭和58年度実施においては、資料が地図とグラフに限られていたが、その後、平成6年度には年表、図表、文書による資料が追加され、平成13年度にはイラストによる資料が使用されている。このように、問題に活用されている資料が多様化してきている。

資料の数が調査の回数を重ねるたびに増加してきている。ただし、平成13年度には、それまでの2セットから3セット(問題数においておよそ1.5倍)になった。

イラストや絵、写真などは、昭和58年度、平成6年度には見られなかった。平成13年度においてもわずか2か所に登場しているに過ぎない。全体的に、こうした形態による問題構成のビジュアル化はほとんど進んでいない。

平成6年度から地図帳という教科用図書を活用して解く問題が登場してきた。ここでは、地図帳の「さくいん」を使って解く問題と、地図帳のなかの指定されたページの地図や資料を活用して解く問題である。

ペーパーテスト問題に活用されている資料の形態の傾向は、先に紹介した研究大会で公開された社会科授業での資

料活用の実態,教科書に掲載されている資料形態の実態とかなりの乖離があることが明確になった。それは,ペーパーテストによる問題という作成上の制約によるものと思われるが,両者のズレは調査結果にも何らかの影響を及ぼしていることが考えられる。社会科の授業や教科書では,写真やイラスト,ビデオ教材などの視聴覚的(ビジュアル)な資料が多用されている。子どもの学習状況をとらえることを目的に行われたペーパーテスト調査においては,教科書において減少傾向にある統計地図やグラフを活用して答える問題が中心になっている。授業での資料活用や教科書における資料掲載の実態とペーパーテスト調査との間にかかなりのズレが見られることが明らかになった。

5 まとめ

本研究のねらいは,これまで国が実施してきた学力調査において,特に第5学年の「資料活用」の能力を問う問題において低下傾向が見られる原因や理由を明らかにすることである。

本研究から明らかになったことは,次の点である。

資料活用の能力が低下してきているのは,社会科授業において活用されている資料が,また主たる教材として活用されている教科書に掲載されている資料が,写真やイラストなどの映像的なもの,実物資料などが多く,地図やグラフ,統計資料,文書資料などは全体的に減少の傾向にある。この傾向は,教科書を見るかぎり,昭和52年版の学習指導要領以降,一つの流れを形成している。一方,ペーパーテスト調査において活用されている資料は,一貫して統計地図やグラフが中心を占めている。

統計地図やグラフなどの資料を活用した社会科らしい授業が十分に展開されていないことにより,ペーパーテスト調査に見る資料活用の能力が十分に育っていないものと考えられる。また逆に,社会科の授業の実態に合わない資料で問題構成されていることによって,その結果「資料活用能力」に低下傾向が見られるのではないかと考えられる。

今後の社会科授業のあり方について,次の三点を提言したい。

その一つは,映像社会を生きている子どもの実態に応じて,写真やイラスト,絵,ビデオなどの資料を活用することのメリットを生かしつつ,社会的事象の意味や傾向,特色など象徴的にとらえることのできる地図や統計地図,グラフ(統計資料),年表などの資料を効果的に活用した授業場面を積極的に設定したい。これらの資料は,学習指導要領の第5学年の目標に位置づけられている重要な「基礎的資料」である。今後,「地図,統計などの基礎的資料を効果的に活用」した社会科授業を積極的に設定し展開していきたい。

その二つは,社会科授業で資料を活用することの意味を確認することである。子どもたちが社会科の学習に親しみを感じ,より実感をもって学ぶようにするためには,社会的事象を実際に観察したり調査・見学したり,さらに体験したりする活動を取り入れることが重要である。楽しい社会科,わかる社会科の基本でもある。しかし,地域社会を対象に学ぶ小学校中学年においてはそれでもよいが,高学年になると,視野を日本全体や世界に向けて,わが国の産業や国土の様子,歴史,さらには国際社会を対象に学ぶようになり,そこでは,多くの場合,実際に観察や見学などができなくなる。地図や統計地図,グラフ(統計資料),文書などの資料を活用した学習にならざるを得ない。こうした資料を活用する能力が十分身につけていないと,学習効果も期待できない。資料活用能力の習得状況は,社会科学習の「生命線」ともなる。また,中学校の社会科では,そのほとんどが教科書や社会科資料集などの図書や文献を活用した学習になる。中学校との関連を図る観点からも,小学校で基礎的な資料を授業に取り入れ,その活用能力を身につけておきたい。

社会科の学習には,社会の現実をより正確にとらえるという役割がある。社会科ではこれまで事実認識などといわれてきた。社会の実態を集約的,科学的に整理されたものが,例えば地図や統計地図でありグラフである。観察や見学といった活動においては,点や線としての理解はできるが,統計などの情報が盛り込まれた資料を活用することによって,それらを全体的に面として把握できるようになる。また,これらの資料を読み取ることによって,「いま」の状況や傾向,課題などがわかるだけでなく,「これから」が見えてくる。未来を予測することができる。これからの社会(未来)を予測する能力は「生きる力」の重要な要素である。社会科を学ぶ意義には,自分は今から社会とどうかかわり,どう生きていくかを考えるところがあり,そのためには地図や統計地図,グラフ(統計資料)などの資料を目的に応じて効果的に活用する能力を身につけていることが一層重要になる。

いま一つは,地図やグラフなどの資料を活用する能力を育てることである。そのためには,次の事項に配慮するこ

とが大切であると考える。

- ・個々の形態の資料の読み取りなど、具体的な方法や手続きを子どもの発達段階に応じて丹念に指導すること（スキル指導の充実）
- ・グラフの読み取り方や書き方は算数科と、また文書資料の活用は国語科とそれぞれ深いかわりがあることから、他教科の学習成果を生かす観点から、他教科とのネットワークをもって指導すること（他教科との関連）
- ・個々の資料の特性を理解させ、目的に応じて資料を選択し、問題解決しようとする意欲と関心を育てること。それらを日常の生活のなかでも生かすよう導くこと（資料活用の日常化）
- ・社会科の年間指導全体を視野に入れて、学習内容や教材の特性を踏まえて、多様な形態の資料を活用する能力が系統的に身につくよう、バランス性とステップ性のある指導場面を設定すること（資料活用能力のカリキュラム開発）

いま、各都道府県や市区町村のレベルで学力調査を実施する動きが盛んである。問題の作成に当たっては、社会科の趣旨はもとより、指導と学習の実態に即して問題構成を工夫することが、社会科の学力の実態把握につながることを改めて確認したい。

（2004年12月8日）

〔参考文献〕

- ・小学校学習指導要領（昭和43年版，昭和52年版，平成元年版，平成10年版，平成15年12月の平成10年版の一部改正）
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『平成13年度小中学校教育課程実施状況調査報告書 小学校社会』（東洋館出版社，15年6月）
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『平成13年度教育課程実施状況調査調査票及び整理票記入の手引き 社会』
- ・文部省初等中等教育局『教育課程実施状況に関する総合的調査研究調査報告書 小学校 社会』（平成9年12月）
- ・文部省初等中等教育局『教育課程実施状況に関する総合的調査研究調査報告書 小学校 社会』（昭和59年8月）
- ・昭和43年版学習指導要領による昭和45年度使用，昭和52年版による昭和56年度使用，平成元年版による平成4年度使用，平成10年版による平成14年度使用，及び平成17年度使用予定の小学校社会科第5学年の教科書（上・下巻）（東京書籍，教育出版）
- ・京都市小学校社会科教育研究会『平成14年度全国小学校社会科研究協議会京都大会 学習指導案』（平成15年2月）
- ・東京都小学校社会科研究会『第41回全国小学校社会科研究協議会研究大会東京大会 研究紀要授業編』（平成15年10月）
- ・熊本県小学校教育研究会社会科部会『第37回九州小学校社会科研究協議会研究大会 熊本大会』（平成15年11月）
- ・北 俊夫著『社会科の思考を鍛える新テスト 自作のヒント』（明治図書 2004年6月）

なお、教科書分析は、岐阜県総合教育センター図書・教育資料室の協力を得て行った。また、各大会における資料の活用状況の調査に当たっては、各地域の社会科研究会の先生方及び授業者にお世話になった。この場を借りて、お礼を申しあげたい。